

「 みんなが安心してくらすために 」

愛媛県 松山市立道後小学校 3年 北地 勇輝

「ひなんしじが出て、ばあばは家においていていいからね。」

7月12日、松山城城山のしゃ面がくずれ、3名の人々がぎせいになった。そのテレビニュースをみながら祖母が話をしたのだ。ぼくはさいしょ、何を言っているのか分からなかった。ひなんしじが出る時はきっと、自分のそうぞうもできないさいがいがおこっているだろう。みんながおそろしくて心細い気持ちになっているはずだ。その中で、家ぞく1人だけをのこしてひなんする、はなればなれになることは考えられないと思った。

この夏、家ぞくとぼうさいグッズ、ひなん場所のかくにんをした。さらに、祖母に安心してほしいと思い、ひなんルートも家ぞくであるいた。

「ほら、だいじょうぶ。あるけるよ。」

と言っても、祖母はだまされたままだった。さいがいがおこっていない道だから、何の不安もなくあることができたのだと、ぼくは気がついた。大雨がふり、土しゃが流れ、地面も平らではないじょうきょうかもしれない中で、ひざのわるい祖母は、家ぞくにめいわくをかけられないと思ったのだ。

祖母のように、体力に自信のない人たちのひなんはどうすればいいのだろうか。まずは、その家に、ひなんの手助けをひつようとしている人がくらしていることを知ってもらうことが大切だ。はあくする支えん者は1人、1か所ではいけない。さいがい時、ひなんを支える人もどんなじょうきょうかわからない。多くの立場の人に、はあくしてもらうことがひつようだと思う。つぎに、道ろ、公園、たてもものなどのせいびだ。ぼくの家ぞくは昔からみかんを作っている。山まで行くとちゅうにさぼうダムがある。さぼうダムは土しゃをせき止めるはたらきがある。じっさい、7月12日の大雨の日も、祖母のみかん山は大りょうの水が流れていたが、さぼうダムの上流で小さな石やおれた木は止まり、どろ水だけがダムの下流に流れていたそうだ。土しゃさいがい不安な場所には、このように、いのちを守るしせつができると、さらに安心する。さいごに、「いのちを守る早めのこうどう」はもちろん大切だが、「生きることをあきらめない」そう思ってもらえるような支えがひつようだと思う。1人ではない、みんなといっしょだと思えることができる、不安をとりのぞく支えんだ。ぼくはこれから、もっとさいがいについてべん強し、祖母だけではなく、1人でも多くの人々が「生きるためにひなんをする」と思える支えんについて考えていきたい。みんなが安心してくらすことができる町にすること。それは、さいがいがおこった時に、支えんする人も支えをひつようとしている人もすばやく動くことのできる町につながると思う。

。